

大学時報

U N I V E R S I T Y C U R R E N T R E V I E W

No.381

2018

7

隔月刊



「3年次演習(日本近世文学)Ⅰ」の授業(東京女子大学)

特集 留学(海外送り出し)に伴う 問題への取り組み

座談会 未来を先導する私立大学の将来像

小特集 海外大学とのダブルディグリー・プログラムの現状と効果

明日への試み 聖学院大学

わが大学史の一場面 成城大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 皇學館大学／聖学院大学／西南学院大学

クローズアップ・インタビュー

順天堂大学スポーツ健康科学部准教授、体操競技部コーチ 富田 洋之さん

日本私立大学連盟



「パレス」と呼ばれ、学生会館として利用されている「旧久邇宮邸 小食堂・御常御殿」



今年が築後100年にあたる「日本館車寄」



現在も大学の正門として利用されている「正門」





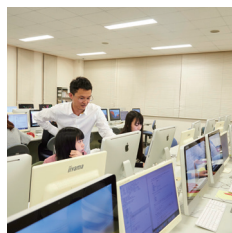
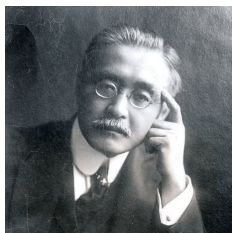
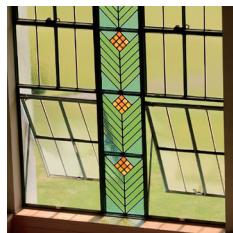
挑戦する知性

一步前へ、一步外へ、
知を实践へと昇華させ、
社会の問いに立ち向かいます。

2018 年 創立 100 周年。
東京女子大学はさらなる高みを目指して始動します。



東京女子大学の本館正面の壁に刻まれた”QUAECUNQUE SUNT VERA”（すべて真実なこと）の銘は、新約聖書「フィリピの信徒への手紙 第4章 8節」に書かれた聖句の一節です。校章は「Service and Sacrifice（犠牲と奉仕）」の頭文字の2つのSを組み合わせたもので、初代学長新渡戸稲造の発案により制定されました。



東京女子大学の特徴は、キリスト教主義に基づいた「一人ひとりを大切にする教育」、そしてリベラル・アーツ教育で育まれる「学ぶことを学ぶ」力です。学生と教員がお互いの人格を尊重しつつ学問にはげむ自由な雰囲気の中、社会に出てからも学び続けて問題を解決していく力が育まれます。



留学制度、休暇期間中の語学研修やケンブリッジ大学での教養講座、ニューヨーク国連本部での研修、タイでのワークキャンプ、教員の企画・引率によるスタディ・ツアーなど、さまざまな国際交流プログラムを実施しています。





現代教養学部

国際英語学科

国際英語専攻

人文学科

哲学専攻／日本文学専攻／
歴史文化専攻

国際社会学科

国際関係専攻／経済学専攻／
社会学専攻／コミュニティ構想専攻

心理・コミュニケーション学科

心理学専攻／
コミュニケーション専攻

数理科学科

数学専攻／情報理学専攻

大学院

人間科学研究科

博士前期課程／博士後期課程

理学研究科

博士前期課程／博士後期課程



Tokyo Woman's Christian University

東京女子大学

〒167-8585 東京都杉並区善福寺 2-6-1

TEL 03-5382-6476

<http://www.twcu.ac.jp/>

大学時報

No.381

2018.7



創立100周年、 そして次の100年

茂里 一紘 ●東京女子大学学長

東京女子大学は1918年4月30日の創立以来、一貫して、キリスト教を基盤としたリベラル・アーツ教育を重視する女子高等教育を行ってまいりました。

創立100周年の本年、新学科を開設し、1学部5学科体制がスタート。国際性、女性の視点、実践的な学びを重視した教育を展開。専門教育と教養教育との結び付きを図り、自ら課題を発見し、知力・能力を行動に移す「専門性をもつ教養人」を育成します。

次の100年も、本学の標語「すべて真実なこと」を心に留め、歩んでまいります。

守るために変わる

1 大学の沿革

松山東雲女子大学は1992年に開設され、今年で27年目を迎える。人口約51万人の愛媛県松山市の中心市街地から3キロほど東に位置し、人文科学部心理子ども学科に子ども専攻と心理福祉専攻の二専攻を持つ小規模な女子大学である。

本学の母体である松山東雲学園は、132年前にたった一人の少女の「学びたい」という願いに込めて、二宮邦次郎牧師が設立した四国最初の女学校から始まった。キリスト教精神に基づく女子校として、明るい夜明けへの希望を「しののめ」の校名に込め、時代のさきがけとなる優れた女性の育成を目指してきた。夏目漱石の小説「坊っちゃん」に登場するマドンナは東雲の女学生、遠田ステガモデルであった

塩崎 千枝子 ● 松山東雲女子大学・松山東雲短期大学学長

という。幼稚園、中学・高等学校、短期大学と大学を併せ持つ女子の総合学園として、今日まで地域に知られ、安定した評価を得ている。

2 女性活躍と女子大学

「女子だけで学生は集まるの?」「多様性の時代に女子だけでよいのか?」といった問いにどう答えるのか。共学化の道を選ばず、今は四国で唯一の女子大学となった本学は、常に自らのアイデンティティを問い続けている。地方の女子大学は、大きな市場で知名度を生かして個性化と特色化を進める都会型の女子大学とはかなり異なる環境の中にある。

愛媛は温暖な気候風土に育まれた温厚で保守的な県民性を持ち、女性を控えめで男性の陰に隠れがちであるが、もっと実力を磨き、可能性に挑戦し、社

会で活躍する力を伸ばすことができるはずだ。卒業後も大半が地元就職し、生活していく地域人材の育成と確保への責任を果たし、人々と社会を支える知性と人間性を備えた女性を育成するために、本学の務めを果たしていきたいと思う。

女性活躍の時代の到来といわれるが、その歩みは遅く、ワーク・ライフ・バランスの実現はまだ遠い。少子化の進行が止まらないのも、この社会が実は若い世代にとって生きにくく、幸せや希望を感じにくい社会になっていることの証しであり、女性の活躍推進と日本社会の持続可能な発展を支える学びの構築と提供は女子大学の大切な使命であろう。

これからのしののめの教育を構想する作業は、キリスト教の精神の「信仰、希望、愛」を基にした学園の建学の精神の確認に始まり、知性と人間性を育む本学の教育理念を「新しき世の鑑となる女性」の育成として掲げ、その教育目的として「一人ひとりを伸ばす自立への教育」、「豊かな知性と心を磨く専門の学芸の教授」、「人と社会と共に活躍できる女性の育成」の3項目を置いた。その下で、現在ディプロマ、カリキュラム、アドミッシェンの3ポリシー

に基づく教育課程およびカリキュラムマネジメントの抜本的改革に取り組んでいる。

3 しなのめの教育力

(1) しなのめの人間教育

教育の質保証を目指して、本学も教学改革のさなかにある。学修成果の評価、新たな学びと教授法の確立、教授力向上と教員評価など、教学面の諸改革と併せ、各専門教育課程の見直しと、人間性を培う特色ある学びを再編し充実強化させた「全学共通カリキュラム」の検討を短大と共同で進めている。

この共通カリキュラムは、本学が力を入れてきた人間教育の明確化と可視化を図り、「知の礎」「ライフデザイン」「地域と共に生きる力」「伝えあう力」の4分野に、教養系、地域理解や地域連携、女性学やキャリア教育、コミュニケーション力育成関連科目などを正規または単位化しないプログラムとして置き、一部は社会人にも開放を予定している。

(2) 保育としのめブランド

本学の教育機能を社会に有効につなぐ子ども・子

育ての知の拠点としてのキャンパスづくりも進めている。東雲の保育者養成は半世紀前に短大で始まり、遊びを中心とした東雲保育の特長ある教育実践は全国的な注目と評価を得ており、附属幼稚園に対する保護者の評判も高い。今秋にはキャンパス内に企業主導型の保育園を開設するが、同園は、これまでの幼児教育の実績を生かした幼保一元的な保育の実践を目指している。これにより、小学校を除き、人間の発達に応じた学びと育ちを0歳から切れ目なく支えるしのめ教育の実践体制が、本学園にはば整うことになる。

短期大学と共同で、実習指導用テキストの執筆や実習専任講師の配置など、専門教育の質向上にも多面的に取り組み、また、「しののめ子ども育成プロジェクト」として、地域の子ども・子育てに係る総合的な知と活動の拠点として教育、研究、実践機能の充実強化と地域連携の体系化を構想中である。秋には、その中核となる「研究センター」を創設し、教育研究の発信拠点として、若手研究者の育成と、時代と地域の要請に応える開かれた教育・実践活動の展開を図る。

(3) 女性の活躍を支える教育実践

本学の特色として、女性の潜在力を伸ばすキャリア形成への丁寧できめ細かい教育支援も挙げたい。本学の教育理念は徐々に全学的に共有され、教職員が力を合わせて学生と一緒に汗を流し、サポートティブで対話と交流に満ちた大学コミュニケーションが育ちつつあり、小規模な女子校ならではの強みとなっている。女性活躍のための理論と実践の学びの充実と体系化に重点的に取り組むかたわら、キャンパスライフを通じて学生に多くの出番と活躍の場を提供し、社会と関わる体験を充実させ、学生のキャリア形成を図っている。自主企画の教育活動やピアサポート、また学生会活動やボランティア活動などを通じて、多様化する学生一人一人に丁寧に寄り添いつつ向学心やチャレンジ精神に働きかけ、自主性と主体性を伸ばしてきた。

2017年には卒業生向けに「しののめ人財バンク」がスタートした。登録者には大学情報をはじめ、学びや就職に関する各種のアップデートなお役立ち情報を提供するなど、地域の女性の生涯にわたる学びと活躍を応援する大学として機能を充実させてい

きたい。

4 守るために変わる

大学は学生獲得を巡る大競争時代を迎えている。

政府は大学間の統合や撤退に向けていよいよ本格的に舵を切った。地方の小規模校はいずれもさまざまな制約を抱えつつ、生き残りをかけて懸命な努力を続けているが、本学のような地方の小さな女子大学が、これからも選ばれる大学であり続けるためにどうしたらよいのか、先の見通しはなかなか立たない。

人口減少の影響は地方に一層厳しく、しかも女子に限れば、18歳人口の推移（2016～2026年）は、四国の減少率（14・4％）が全国（9・6％）より高く、中でも愛媛県の女子の減少数が最も多い。

女子学生の確保は今後とりわけ厳しい状況を迎えることになる。学生募集活動にはこれまでも全力、フル回転で取り組んできたが、思うような結果はなかなか出ていない。理事会主導のガバナンスの強化と改革への組織的な取り組みを本格化させ、攻めの戦略に転じつつあるが、生き残りをかけて胸突き八丁の苦しい坂を登るのはまだこれからである。経営基

盤強化の課題に正面から取り組み、守るためにこそ変わらなければならない時を迎えている。

本学には母娘二代、三代の縁でつながる学生も多く、入学して良かったという声もよく聞く。小さくても温かく魅力にあふれ、女性の力を伸ばす良い大学だと自負してはいるが、それを世間に分かってもらう努力はまだ足りない。もっと発信力を高め、地域とつながる努力、社会が求める教育研究活動を強化し、力強く学生の力を伸ばし、実証的に社会に伝える努力など、取り組むべき課題はまだ多い。困難な時にこそ、個人頼みにせず皆で力を合わせて努力するのが人間集団の知恵だと思うが、本学にも今、教職員が心を一つにして坂道を登る覚悟が問われている。来春には学舎の全面的な新築・改修工事が終わり、美しいキャンパスに生まれ変わる。小規模であることを強みに変え、選ばれる大学、来て良かったといわれる良質な大学であり続けるために、しのめの伝統の灯を灯し続けるために、守るためにこそ変わることができるか。今、「チームしのめ」の底力が試されているようだ。